



## 編集後記：紀要のための弁明

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 憲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/3429">http://hdl.handle.net/10466/3429</a>

## 編集後記：紀要のための弁明

人間科学科は、大阪府立の三大学の統合・再編に伴い、人間社会学部の一学科として 2005 年 4 月に発足した。教員の以前の所属は、旧大阪府立大学では主に総合科学部人間科学科であり、同学部総合言語文化学科および言語センターの教員の一部も参加している。大阪女子大学からは人文社会学部人文学科国際文化専攻、ならびに人間関係学科の教員が加わった。さらに臨床心理分野では教員定員削減の枠外として新たな教員を迎えた。なお、新大学設立時に総合教育研究機構に所属することになった教員も少なくないが、これらの方々にも人間科学科の授業担当をお願いしている。また、人間科学科の多くの教員が、大学院で人間社会学研究科人間科学専攻に属している。この専攻には上述の総合教育研究機構の教員も参加している。

本誌は、この新しい人間科学科および大学院人間科学専攻の紀要として新たに刊行されるものである（従来からある『大阪府立大学紀要：人文・社会科学』は総合教育研究機構が編集・刊行を引き継ぐ予定である）。学科教員の研究分野は多岐にわたり、紀要論文に重きを置かない分野も含まれている。そのため、本紀要が人間科学科のすべての研究活動を網羅しているわけではない。

本紀要では査読は行なわず、原則として投稿された論文をそのまま掲載している。このことについて、以下、紀要委員の個人的見解を述べたい。

査読に基づくピア・レビューのシステムの意義と重要性はいまさら述べるまでもない。多くの分野ではこのシステムなしに教員の採用も評価も不可能である。研究者にとってのメリットも大きい。仮にあなたが悪意ある同僚や無理解な大学執行部に囲まれていても、顔も名前も知らない外国の誰かが論文を評価してくれる。継母に邪魔されずに舞踏会に行ってチャンスをつかむことができるのだ。

これに関連して、本題からの少々脱線をお許しいただきたい。ピア・レビューという制度には、レフェリーが必要である。すなわち、無報酬で査読を引き受ける優秀な研究者の存在が前提となっている。ところが近年の大学では目に見える成果ばかりが要求され、査読という、労力が必要でしかも匿名の仕事に割ける時間が減ってきている。ピア・レビュー制度がなければ、ほとんどの専門分野が機能せず、大学の運営も必然的に不可能となるのに、個々の大学が教員を多忙にし、ピア・レビューを、そして学会誌や学会運営そのものを危機に追いやっているのである。これは自校だけが研究システム維持のためのコスト負担を免れようという行為である。大学全体が囚人のジレンマに陥っていると言えよう。

これは憂慮すべき事態であるが、一方でピア・レビューが万能ではないという当たり前の事実も忘れるわけにはいかない。レビューが常に良心的・公正に行なわれると仮定しても、査読システムのもとでは、すでに確立した手法を異なった対象に適用する論文が有利になりやすい。

その結果、小粒で二番煎じ的な論文が増えることは夙に指摘されている。

特に人文系の分野では、重要な業績を限られた長さの雑誌論文で展開することは困難であり、新たな発想をまとめた業績にまとめるまでに長い時間がかかり、またその業績の評価が定着するにも時間がかかる。しかしいったん評価が確立した論文・書籍の寿命は数十年に及ぶ。短期間の査読に基づいて定期的に刊行される学術雑誌だけでは、この種の業績を育てることはできないのである。自然科学分野で紙に印刷された雑誌という形態そのものが使命を終えつつあり、電子ジャーナルが主流となっていることとは対照的である。

仮に紀要「論文」の大半が、自己満足に過ぎない原稿であったとしても、それでも紀要が必要な理由の一つがここにある。しかも紀要の刊行はきわめて安上がりな事業である。近年、多くの大学が、所有するリソースの換金に積極的になる一方で、僅かでも無駄と見える経費を削減している。紀要が槍玉にあげられることも少なくない。民間企業から国立大学法人に招かれた理事の最初の仕事が紀要の廃止であったという話も聞く。しかし廃止によって節約された金額はその理事の年俸よりはるかに少なかったという。

その一方で、巨額の研究費が無駄に使われる事態は後を絶たない。厳正なピア・レビューに基づいて一流の国際雑誌に掲載されたはずの論文の結果の多くが再現不可能で、捏造が疑われるという事態が最近起こった。疑問を持たれた論文の著者のグループには、2000年以降、14億円の国費が研究費として投入されていたという。捏造があったかどうかはここでは重要ではない。発表された結果の多くが再現不可能であると報道された以上、その論文が他の研究者によって今後利用されることは期待できない。また、これらの研究に関連する特許が今後収入をもたらすことも期待薄であろう。要するに14億円は烏有に帰したのである。この額は本学科紀要の印刷費用の数千年分に相当する。

それに、脚光を浴び、多額の研究費が支給される分野では、いずれ誰かが成果を上げる。特に自然科学ではそうである。その研究者がどの国のどの大学に属するかは当事者にとっては一大事であるが、人類全体にとってはそうでもない。アインシュタインがいなくても相対論はいずれ発見されたのだ。しかし人文系の分野では、画期的な業績は多分に個人的である。フーコーがいなかったら我々の生きている世界は確実に違ったものになっていただろう。(フーコーかぶれの半可通の大学院生がいらない分、教員の苦労が軽減されただろうという意味で言っているのではない、念のため。)その意味では本当の意味で世界を変えるのは自然科学よりむしろ、人文学・社会科学の諸学科だと言うことも可能であろう。

本紀要が、フーコーに匹敵する業績を生むなどという誇大妄想を振り回すわけではもちろんないが、たとえささやかでも他では決して生まれえない成果を育て、この世界を僅かながらでも変える力となることを期待したい。